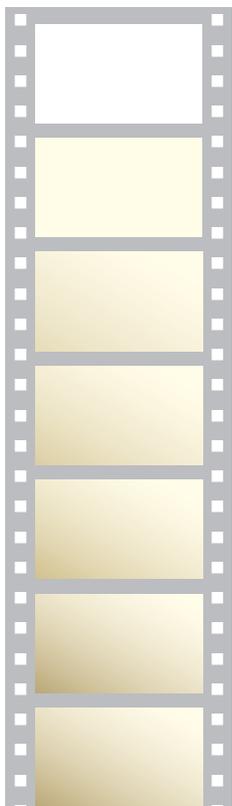
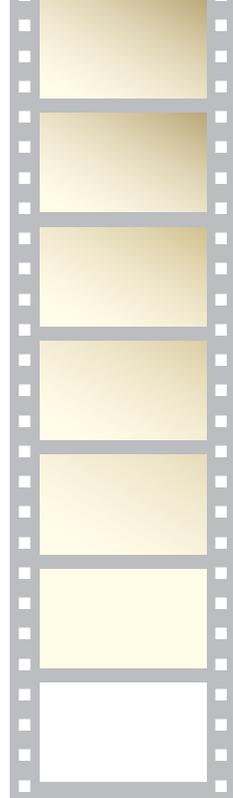


伸<sup>ノ</sup>さんのシネマトーク

鈴木 伸夫





## 第五十三回 「DJ 仲間の友情」①

昭和42年（67年）、仙台市内に一軒だけだった「DJ喫茶」も、新しい店がオープンし、老舗の「喫茶R」でDJを担当していた人たちは、契約していたプロダクションの指示で新しい店「喫茶L」に移って行きました。

特訓で何とか番組をこなせるようになったぼくは、デビューして一カ月悩んでいました。自分に合ったテーマ曲は何か？その音楽に合う話し方とは？また、その声のトーンとは？など、いろいろな研究しながらマイクに向っていったのです。

そのためには、他人ヒトの放送を聞いて勉強することも大切なことでした。

店同士は売り上げ競争していても、DJ同志は先輩、後輩の仲がよく、お互いの店を往き来して、先輩が後輩へアドバイスをしてくれるなど、和気あいあいの雰囲気でした。

なかでも「Oオーさん」と「ARアラさん」は大学の一学年先輩で、クラブ活動は「放送研究会」に入っていました。ぼくたち「映画部」の制作する「学院ニュース」や「自

主制作映画」のナレーション、そして、声の出演などを以前からお願ひしてしまいたから顔見知りで、すぐお友達になりました。

「Oさん」は受験競争のない中高一貫教育でT.G大学の経済学部へ、「ARさん」は、ぼくが転入試験を受け、やっと入学した市立高出身で法学部の一回生。

二人とも長身で、スマート、キャンパスでも目立つ存在でした。

その先輩二人がぼくのDJを聴きに来たのは（いや、偶然ぼくの担当だったのかも知れませんが）、ぼくの話し方のトーンとテーマ曲が融合した雰囲気になったDJデビューの一カ月後でした。

先輩二人が店内でモニターしているのも知らず、番組はスタートして、終わりました。ワンマンジョッキーは、番組前のスタンバイと店内放送中が忙しく、まして、お客さんに背を向けてアナウンスしているため、お客さんがどんな表情をして、どんな感想を持ったのかわかりません。

番組が終わってホッとしながらレコードを片付けていると、隣のレジ（会計）の女性から『さつき「Oさん」と「ARさん」がこのメモを鈴木君へ渡して！』と置い

てったと言うのです。メモの中味は？次回のお楽しみに！

伸 (続)

平成  
24年  
11月